

修士論文（要旨）
2014年1月

世界の日本語使用者をつなぐオンラインコミュニティの実践と考察

指導 宮副ウォン裕子 教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
212J3014
高橋敦

目次

第1章 はじめに.....	1
1.1 研究背景.....	1
1.2 先行研究.....	3
1.3 研究目的.....	4
第2章 コミュニティ作成.....	6
2.1 SNS.....	6
2.1.1 CMC ツールの分類.....	6
2.1.2 従来のテキストベース, 非同期型ツールとの違い.....	6
2.2 Facebook.....	7
2.2.1 Facebook の利用者.....	7
2.2.2 「いいね!」について.....	9
2.2.3 ページとグループ.....	10
2.2.4 Facebook を選択した理由.....	11
2.3 設計.....	11
2.3.1 コミュニティの運営.....	11
2.4 宣伝.....	15
第3章 参加者データ分析.....	17
3.1 地域・年齢・性別.....	17
3.2 コミュニティの参加者.....	21
3.2.1 新しい学習者.....	22
3.2.2 日本語使用機会の少ない学習者.....	25
3.2.3 来日経験のある日本語使用者.....	25
3.2.4 海外で日本語を教える非母語話者教師.....	27
3.3 日本語レベル.....	28
3.4 考察.....	29
第4章 社会的存在感.....	33
4.1 社会的存在感.....	33
4.2 分析方法.....	34
4.3 分析詳細.....	36
4.4 分析.....	42
4.4.1 表出の多かった指標について.....	42
4.4.2 表出の少なかったカテゴリーについて.....	45
4.5 考察.....	48
第5章 総合的考察.....	52
第6章 まとめと今後の課題.....	56
参考文献	

【キーワード】 自律学習, SNS, 社会的存在感, 社会的視点, 新しい日本語学習者

要旨

国際交流基金の海外日本語教育機関調査(2012)によると、世界136の国・地域において、398万人余りが日本語を学習している。しかし、世界的にインターネットが普及しつつある現在、日本、もしくは日本語に興味をもち、教育機関に属さずに独学で学ぶ「新しい学習者」も数多く存在していることが予想される。彼らに他の日本語使用者とのつながりを提供することができないだろうか、それが本研究のきっかけである。

他者とのつながりという視点で注目されるのが、近年急速に利用者を増やしているソーシャルネットワークワーキングサービス(以下 SNS)である。日本語教育に関する研究においても SNS を用いた活動の報告が増えつつある。しかし、まだ新しい分野であり、報告の数は十分とはいえない。また、実践の多くは大学等に所属する学生を対象に行われたもので、教育機関に属さない、国内外の日本語学習者・使用者を対象とした実践の報告は極めて少ない。

そこで本研究では、オンラインコミュニティの可能性を明らかとするため、1. オンラインコミュニティにはどのような参加者が集まるのか、2. コミュニティ上でどのようなやりとりが行われるのか、の2点を研究課題(RQs)として設定し、SNSを用い世界の諸地域の学習者に日本語使用機会を提供することを目的としたオンラインコミュニティを作成し、実践を行った。

実践の結果、以下の2点が明らかになった。1点目は、コミュニティに対する多様な参加者の需要である。コミュニティには日本語教育機関がない地域を含む、45を越える国・地域から5000人を超える参加者が集まった。そして、参加者のデータやコメントを分析することで、これまで研究や調査の対象となることがほぼ皆無であった、「新しい学習者」の存在を明らかとすることができた。また、オンラインコミュニティへの需要は学習者のみにとどまらず、コミュニティには海外在住の日本語教師や、日本語を忘れつつある日本滞在経験者等も参加している。テキストベース、非同期性というコミュニティの特徴は、彼らが日本語運用レベルや居住している地域の物理的・文化的差異を越えて、日本語を使用し、多様なアイデンティティを保持したまま、つながることを可能とした。オンラインコミュニティの可能性は、単に遠隔地の参加者を結びつけるだけにとどまらない。

2点目は、参加者がテキストのやりとりであっても、自身の存在感を表出できているということである。やりとりの分析には Garrison (2011) の社会的存在感の枠組みを援用し、定量的分析を試みた。分析の結果、参加者はテキストであっても豊富な感情表現を行うなど、存在感を表出していた。オンラインコミュニティにおいて、参加者が他者の存在感を感じられるか、自身の存在感を表出できるかどうかは活動の成否に直結する。本実践でも、参加者の存在感の表出で、やりとりがより活性化される可能性が示唆された。社会的存在感という概念はコミュニティ設計の指標となりうる。

もう1点、コミュニティの作成、運営経過を詳細に報告・分析したことも本研究の意義といえる。実践の中での試行錯誤の報告が、今後同様の実践を行う際の一助となると考える。

本研究では日本語学習者や使用者が、オンラインで他の日本語使用者とつながるための、

「サポーター」と「オンライン上で他者とつながるための日本語」の必要性を提言した。近年、第二言語習得研究において、従来の認知的視点に加えて、「相互行為への参加」を習得の母体と考える社会的視点への注目が高まっている（義永 2009）。クラムシュ（2007）はグローバル・ネットワーク時代における異文化リテラシーには話すこと、書くこと以外に、電子メールやウェブを用いたやりとりを含むべきことを主張しているが、社会的視点に立てば、インターネットを用いたやりとりを身につけるためにはインターネット上のコミュニティへの参加が前提となる。従来の研究のほとんどはオンラインコミュニティを学習や協働、情報共有の手段としているもので、オンラインコミュニティへの参加そのものを目的としているものは見られなかった。サポーターの適切な支援により、彼らがオンライン上で日本語を用い、世界中の日本語使用者とつながることができれば、彼らの自律的な学習の機会は大きく広がり、学びの保障へと結びつく潜在性もある。

一方で本研究には、分析・考察の対象が稿者の作成した一つのコミュニティのみであること、個人に注目した分析が少ないこと、参加者視点での評価が欠如していること、といった限界もある。オンラインコミュニティを設計し、運営するには多大な労力を要するため、1人ではなく研究者ネットワークによる研究が求められる。「オンライン上で他者とつながるための日本語」には「世界とつながる日本語」としての可能性がある。実践と検証を繰り返し、「新しい日本語学習者」の参加と学びの支援方法を探りたい。

参考文献

〔邦文〕

- 梅田康子(2005)「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割ー学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探るー」『言語と文化』第12号, 59-77.
- クラントン (2010) 入江他訳『おとなの学びを拓くー自己決定と意識変容をめざしてー(6版)』鳳書房(原著: Cranton, A Patricia, “Working with Adult Learners”, 1992.)
- クレア・クラムシュ(2007)「異文化リテラシーとコミュニケーション能力」佐々木倫子・砂川裕一・門倉正美・細川英雄・川上郁雄・牲川波都季(編)『変貌する言語教育ー多言語・多文化社会のリテラシーズとは何かー』第1章, くろしお出版, pp.2-26.
- 国際交流基金(2013)『海外の日本語教育の現状-2012年度 日本語教育機関調査より』くろしお出版
- 義永美央子(2009)「第二言語習得研究における社会的視点ー認知的視点との比較と今後の展望ー」『社会言語科学』第12巻, (1), 15-31.
- 山田政寛・北村智(2010)「CSCL研究における「社会的存在感」概念に関する一検討」『日本教育工学会論文誌』Vol.33, (3), 353-362.

〔欧文〕

- Garrison, D. R. (2011). *E-Learning in the 21st century: A framework for research and practice (2nd Ed.)*. London: Routledge/Taylor and Francis.
- Gunawardena, C. N., & Zittle, F. J. (1997). Social presence as a predictor of satisfaction within a computer-mediated conferencing environment. *American Journal of Distance education, 11(3)*, 8-26.
- Short, J., Williams, E., & Christie, B. (1976). *The social psychology of telecommunications*. London: Wiley.
- Tu, C-H., & McIssac, M. (2002). The relationship of social presence and interaction in online classes. *The American journal of distance education, 16(3)*, 131-150.
- Wenger, E. (1998). *Communities of practice: learning, meaning, and identity*. Cambridge: Cambridge University Press.

実践ページ

にほんごではなそう！ nihongo de hanasou !
(<https://www.facebook.com/nihongodehanasou>)